

# アメリカ小説と批評の研究

巽 孝 之

アメリカン・ルネッサンスを代表する自然文学者ヘンリー・デイヴィッド・ソローの誕生 200 周年にあたる 2017 年度は文化人類学者・今福龍太の『ヘンリー・ソロー野生の学舎』（みすず書房、2016 年）が第 68 回読売文学賞（随筆・紀行賞）を受賞するという朗報で始まった。

それに対応するように 2017 年度には同時代の代表的文学者をめぐる力作が相次ぐ。

まず堀内正規『エマソン——自己から世界へ』（南雲堂、2017 年 10 月 11 日）は、ソローの師匠である超越主義思想家のテクストをじっくりと読み直すばかりか、その伝記的背景をも巧みに導入することで、昨今の文学理論を批判しつつアメリカ文学史的な定説をも果敢に覆そうとする野心作である。扱っているのは、「ネイチャー」から「自己信頼」、「神学部講演」など多岐に渡るが、とりわけ著者の手法が功を奏していると感じたのは最初の妻エレンや息子ウォルドーの死がいかにエマソンの著作に影響を及ぼしたかをめぐる考察である。ユニテリアン牧師として活躍する期間とエレンとの結婚生活の期間がほぼ合致すること、ウォルドーの死の直後の日記が二ページ分、破られていることの意義や、エマソンをロマン主義的文脈で解釈するのは間違っていないがそれは「ネイチャー」のメッセージのある「一つの側面をエマソン思想の中心とみなす」もので「俗流超絶主義への偏見」にすぎないとする批判など、随所に啓発的な示唆が見られる。ニーチェ、ハイデggerの生の系譜を重視する本書は、かつて寺田建比古が発表したメルヴィル研究の名著『神の沈黙』（1968 年）を彷彿とさせる。

エマソンを取り巻く同時代ロマン主義作家では、ホーソーンとメルヴィルを扱った力作が並んだ。

まず、中西佳世子が京都大学へ提出して受理された博士号請求論文『ホーソーンのプロヴィデンス——芸術思想と長編創作の技法』（開文社出版、2017 年 12 月 20 日）は、通常「神の摂理」と訳される“Providence”の概念が特にホーソーンの四大ロマンス『緋文字』『七破風の屋敷』『プライズデイル・ロマンス』『大理石の牧神』にどのように表現されているか、そこでは物語のメインプロットとは別の因果関係を成す水面下のプロットがいかに機能し「二重のナラティブ」を織り成しているかが、克明に分析されて行く。最後の補章ではかつてボードゥン大学の同窓であったアメリカ合衆国第 14 代大統領を主役にした『フランクリン・ピアス伝』に秘められたホーソーンの南北戦争における黒人奴隷制と神の計画に対する見解が再吟味され、物語学と政治学を架橋して行く筆致が圧巻だ。

## アメリカ小説と批評の研究

次に橋本安央『痕跡と祈り——メルヴィルの小説世界』（松柏社、2017年11月20日）は、アメリカ文学研究では定番と化した感のある孤児のモチーフを、イシュメールにもエイハブにも当てはまる棄子のモチーフと読み替え、ジェンダー論を十分に意識した精神分析批評を足場に、具体的な19世紀の精神病の文脈を導入し、時に新歴史主義とも見える洞察溢れる批評である。具体的には、第五章「狂気の鏡——『詐欺師』」において、メルヴィル現役最後の長編小説を彩る精神錯乱が著者自身の精神的不安定の伝記的記録のみならず『白鯨』のイシュメールや『ピエール』の主人公に至るまで頻出していることにも留意しつつ、北米精神病院建設史の文脈で再評価していく論理構成に旧来の研究にない独創性を感じた。

上優二『スタインベックの物語世界——生と死と再生と』（彩流社、2017年11月30日）は、長年この作家を深く研究し本書を計画しながら、惜しくも2015年に急逝した著者の遺稿を、日本スタインベック協会有志が編纂し刊行にこぎつけた一冊。しかしその内容は、『怒りの葡萄』や『エデンの東』を堅実に読み直しながら、スタインベックの中に世紀転換期の自然主義とともに19世紀中葉のロマン主義的超越主義が胚胎しており、さらには人種差別への批判を行いつつも白人意識を免れることなく、ヴェトナム戦争にも一時賛意を表して非難を浴びていた経緯をも考察した、きわめて包括的なもので洞察力にあふれている。

つぎに、アメリカ文学史的視点から一石を投ずる単著に移る。

高野泰志『下半身から読むアメリカ小説』（松籟社、2018年3月15日）は、その各章にセクシュアリティやジェンダーをめぐる意識が貫かれているのは間違いないが、茶目っ気たっぷりの著者はそれをあえて「下半身」と命名することで、19世紀アメリカン・ルネッサンスのロマン派男性作家たちから20世紀第二次世界大戦後の男性作家たちにおよんで培われた男性的凝視がいかにアメリカ的女性像を構築したかを——ポーの女性蔑視やトウエインの強姦願望など危険な話題をも取り混ぜながら——生き生きと物語る。

大井浩二『米比戦争と共和主義の運命——トウエインとローズヴェルトと〈シーザーの亡霊〉』（彩流社、2017年4月30日）は、世界最初の民主主義国家がいつしか帝国主義国家へならざるをえない逆説の起源をシーザーが最終的には皇帝として治めたローマ共和国転じてはローマ帝国の運命に求め、その論理逆転こそは世紀転換期の米比戦争においてもそっくりそのままあてはまることを、トウエインやハウエルズ、ジェームズ兄弟やオーウェン・ウィスター、レイモンド・ランドン・ブリッジマン、アーネスト・ハワード・クロズビーなど少なからぬ文学作品を精読することによって巧みに例証して行く。特に第三章「国民的作家の変身」では、米西戦争と米比戦争を睨んだ反帝国主義者トウエインが風刺と諧謔に満ち満ちた二つのエッセイ「暗きに座する民に」（1901年）、「ファンストン将軍を弁護する」（1902年）を発表し、その思いをプ

## 回顧と展望

ラックユーモア短篇「戦争の祈り」(1905年)に結実させた歩みとともに、まったく同じ1905年にハウエルズが発表した短篇小説「イディーサ」もまた、婚約者のジョージを積極的に送り出す愛国的にして好戦的なヒロインの姿を皮肉たっぷりに描き出す反戦小説になっているのが、鮮やかに分析される。アメリカという国の矛盾と魅力の双方がアメリカ小説の可能性を成しているのをこれほどに実感させる批評はない。

2017年度に最も prolific であったのは武田悠一だろう。もともと構造主義、記号論、脱構築の理論に通暁していた彼は、大学生向けに文学から映画、アニメまでを横断する批評理論の教科書『読むことの可能性——文学理論への招待』(彩流社、2017年8月25日)を出すとともに、まさにそうしたポスト構造主義理論からアメリカ文学史を読み直す『アレゴリーで読むアメリカ／文学——ジェンダーとゴシックの修辞学』(春風社、2017年12月24日)をも上梓した。前者が理論で後者が実践を担う。とりわけ後者は、16世紀、アメリゴ・ヴェスプッチのアメリカ大陸計測時代から17世紀のピューリタン植民地時代、18世紀のトマス・ジェファソン草稿になる「独立宣言」などを最も今日の視点で読み直し、それをアメリカン・ゴシックの伝統に接続したうえで、後半ではアメリカにとってのメアリ・シェリー『フランケンシュタイン』の意義を映画アダプテーションの分析によって巧みにあぶり出す。

その意味では、同書は波戸岡景太『映画原作派のためのアダプテーション入門——フィッツジェラルドからピンチョンまで』(彩流社、2017年10月25日)と併読すると、いっそうその面白さを増すかもしれない。武田の著書が植民地時代以来のアメリカ文学史から出発している一方、波戸岡の著書は20世紀以降のアメリカ作家に絞り、その小説がいかに映画化によって翻案され成否を問われるか、そして翻案とは翻訳同様、それ自体が「小説単体でも映画単体でも成し得なかった、新しい文化的な物語を生み出してしまうもの」であり、遠い未来には「作者不詳の『物語』」になりかねないとすら示唆する。フィッツジェラルドの『華麗なるギャツビー』やトマス・ピンチョンの『インヒアレント・ヴァイス』の分析はとりわけ力がこもっているが、本書最大の収穫は、そもそも映画化によってこそ小説の「原作」という概念がもたらされたという発見に潜む。

鷺津浩子『文色と理方——知識の枠組み』(南雲堂、2017年9月28日)は、一風変わったタイトルだが「あいろとりかた」と読む。落語で「物の文色と理方がわからぬ」というと「チンプンカンプン」を意味するというから、なんとも洒落な命名ではないか。しかもその序文は、著者の勤務先に近い筑波山に住まうと伝えられた雷獣や鯨の神話伝説的エピソードから始まるのだから、いつしか読者は啓蒙主義者ベンジャミン・フランクリンを介して、白鯨モビィ・ディックを追跡する海図へと自然に誘導される仕掛けだ。ここで著者は、先立つ単著『時の娘たち』(南雲堂、2005年)に引き続き、「知識の枠組み」から文学と科学の認識論的準拠枠を脱構築するという、至極ハードで

## アメリカ小説と批評の研究

シリアスなアメリカ文学精神史を構築せんと試みている。事実、全9章からなる力作論考群の主題にはエマソンからポー、メルヴィルまでアメリカン・ルネッサンスの代表的な書き手たちが並ぶが、やはり著者専門中の専門であるホーソーン研究を中心にした章において、傑作長編『緋文字』を流星学や墓地考古学からテキストの盲点へ迫る視点が斬新であった。

単著総括の最後に、昨年不注意から洩れてしまった木原善彦『実験する小説たち——物語るとは別の仕方』(彩流社、2017年1月17日)に言及しておきたい。かつて1960年代から80年代にかけて数多く試みられた前衛小説の一群をポストモダン小説と呼びならわしたものだだったが、トマス・ピンチョンを専攻する著者は自己の関心の範囲を時代的国家的制約にこだわることなくさらに押し広げ、ジェームズ・ジョイスやウラジーミル・ナボコフからフリオ・コルタサル、マーク・ダニエレブスキー、デイヴィッド・ミッチェル、果ては我が国の円城塔までを射程に収め批評的に解説している。アメリカ文学から出発しながら、かくも広範にして要領を得た世界文学マップを編集した力量に感嘆した。

\*

共同研究へ移る。

質量ともに最も充実し、いかにも研鑽を積み重ねた共同研究らしい共著に仕上がっていたのは日比野啓・下河辺美知子編『アメリカン・レイバー——合衆国における労働の文化表象』(彩流社、2017年10月25日)であった。昨今では、一種の業績主義によって共著が乱立する傾向にあるが、本書の場合は、しかるべき動機としかるべき執筆陣に支えられているのが、最大の強みと言える。まず動機はといえば、ポストモダン以降の労働観がフレドリック・ジェームソンのように大幅に変質し、古典的なマルクス主義で印象付けられていた労働そのものが消失して労働なしに富が生まれるという前提が提起されるようになったが、これに対し、本書編者たちとも親交が深く、惜しくも2013年に47歳という若さで急逝したアメリカ文学者・三浦玲一は、例えば契約社員や外国人が耐え忍ぶ搾取労働が不可視化されることによって、そうした労働者たちが少なくとも伝統的なリアリズム文学の主人公にはなり得ていないことを示唆しており、それに賛同する編者たちと執筆者たちは、本書において、旧来の労働観の再検討とともに、これまで見えなかった労働形態においても、細心の注意を払っている。文学から文化に及ぶ刺激的な論考全11編のうちでも、権田建二の「みじめなものたちの明日——『風と共に去りぬ』における労働・パターナリズム・所有」が南北戦争時代の囚人貸出制度が黒人奴隷制度よりはるかに劣悪な条件で実施されていたことを明かし、新田啓子の「家内労働者という種族——生の境界とヘンリー・ジェームズ」が家庭内部に存在しながら主婦や家族に比べて見えない労働者である口述筆記タイプ

## 回顧と展望

ストのケア労働に焦点を当てており、とりわけ読みごたえがあった。

佐川和茂・坂野明子・大場昌子・伊達雅彦『ホロコースト表象の新しい潮流——ユダヤ系アメリカ文学と映画をめぐる』(彩流社、2018年3月30日)は、全七編の論考のうち佐川論文が半数に近い三編を占めるという構成がいささか特殊に映る。しかし共同研究としては、坂野が序文に当たるフィリップ・ロス論で述べているように、ナチス・ドイツのホロコーストがアメリカ民主主義礼賛のためにままと利用されたのではないかと、戦後のイスラエルがホロコーストの過去を国際戦略に利用し始め、同政府がパレスチナに対して行なっていることがどこかナチス・ドイツのやり口を模倣してはいないかといった問題意識は正しい。この視点から佐川が読み直すベロー、マラマッド、シンガーといった伝統的ユダヤ系作家も魅力的だが、坂野がロスを継ぐ新世代の作家たちであるネイサン・イングランダーやマイケル・シェイボンを紹介し、大場がカズオ・イシグロの記憶をめぐる問題意識からニコール・クラウスを読み解いているのもユダヤ系文学の将来への指針として見逃せない。

貴志雅之編『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』(金星堂、2018年2月28日)は、我が国を代表するアメリカ演劇研究者による編著ではあるが、多彩な執筆陣を得てジャンルは演劇に止まらず小説や文化史にまで及び、トマス・ジェファソン起草になる「独立宣言」をじっくり再読した上で、21世紀の視点を活用した論文が勢ぞろいした。中でも後藤篤の「明白なる運命——ウラジーミル・ナボコフの『プニン』におけるハッピーエンドの追求」がアメリカを第二の故郷と呼ぶ亡命作家独特の米ソ冷戦期の幸福観をあぶり出し、白川恵子の「ナンシー・ランドルフの幸福の追求——歴史／小説にみるジェファソン周辺の『幸福の館』」が「独立宣言」草稿執筆者自身の家庭的幸福を揺るがす事件を扱い、山本裕子の「アメリカン・ドリームの子——フレム・スノーブスと五〇年代のフォークナー」が南部作家によるアメリカン・ドリームの限界の認識を露呈させており、それぞれ新境地を開拓している。

中央大学人文科学研究所編『アメリカ文化研究の現代的諸相』(中央大学出版社、2018年3月10日)は、力作論文六編を集めたものだが、タイトルからして主題が今ひとつ絞り切れておらず、共同研究のまとまりとしては、いささか弱い。それでも近藤まりあがポール・オースター『闇の中の男』論が虚構の内部のリアリティを分析し、富士久夫のメルヴィル「バートルビー」論が作品最終部分のみにこだわらずそこに自由意志の可能性を読み取ろうと検証している論旨は印象に残った。

森有礼・小原文衛編『路と異界の英語圏文学』(大阪教育図書、2018年)は一転、共同研究全体の主題そのものはロード・ナラティヴなので明確なのだが、扱う国やジャンルがあまりにも幅広く、容易には評価し得ない。それでも、共編者の森による『『悪魔のいけにえ』を観るフォークナー——都市伝説、ロード・ナラティヴ、『サンクチュアリ』』の定説を打ち破る驚くべき読解には、今後のアメリカ文学／文化研究の将来を

## アメリカ小説と批評の研究

垣間見せるような新次元が切り拓かれていたことは、明記しておこう。

\*

日本アメリカ文学会第8回新人賞はShihoko INOUE(井上詩歩子) “‘What am I to make of these contradictions?’: Sylvia Plath’s Domestic Poems” (同学会英文号 *The Journal of the American Literature Society of Japan* 第16号 [2017]) に決まった。また、同学会第2回学会賞は渡邊克昭『楽園に死す——アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』(大阪大学出版会, 2016年) に決まった。双方とも、2017年10月14日に鹿児島大学郡元キャンパスで開催された同学会第56回全国大会の開会式にて贈賞式が行われた。

\*

翻訳では、多くの研究論文が書かれながらも邦訳に恵まれなかった古典の本邦初訳として、共和政時代の感傷小説の古典、ハナ・ウェブスター・フォスター/田辺千景訳『コケット——あるいはエライザ・ウォートンの物語』(松柏社, 2017年6月10日) とリアリズム文学においてヘンリー・ジェイムズと並び称されるウィリアム・ディーン・ハウエルズ『近ごろよくあること』/武田千枝子、矢作三蔵、山口志のぶ訳(開文社出版, 2018年1月11日) が相次いだのは、まことに慶賀すべき事件と言える。また、サンドラ・キャッツ/藤本雅樹訳による『エリノア・フロスト——ある詩人の妻』(晃洋書房, 2017年1月30日) は、国民詩人ロバート・フロストの長年謎であった部分を照射した貴重な伝記だ。新訳では、マーク・トウエイン/柴田元幸訳『ハックルベリー・フィンの冒けん』(2017年12月19日) が、数々の名訳により第6回早稲田大学坪内逍遙大賞を翻訳家として初めて受賞した訳者の受賞第1作として意義深い。

(慶應義塾大学教授)